

## 母が作ってくれた紙芝居

青森県弘前市立船沢中学校

一年 下山 響

私には、今年で十一歳になる弟と、母と父がいます。

四年前の夏のあの日、二階で弟と母と私と父でねていた時のことです。突然、ドンという音と、あわてた母の声をはじまりに、階段を駆け上がってくる祖母の足音と母が呼んだらしき救急車のサイレンの音、ドタドタとかけつけるたくさんの大人たちの足音が聞こえてきました。そして、祖母はあせる心をおし殺して、つとめてやさしく私と弟に言いました。「ばあちゃんといっしょにねよう。」

あの日、私は、何かよく分からない不安とこわさの中で、様々な声を聞いたのです。

次の日の朝、起きて台所に行ってみると、「おはよう。」

と言う大人たちの声の中に、一つ声が届らないことを、うす開きの目で、そして耳で確認したときの不安で高鳴る心臓の音を今でも覚えています。

父は手術をし、その後はリハビリが続きました。入院生活は五カ月にもおよびました。

「周りを心配させないように。」私はそう思って悲しい声、さみしい声を、誰にも発しませんでした。学校では、何もなかったように生活していましたが、

何とも言えない不安な気持ちがいっつも心の中にありました。

そんなときに、母が紙芝居を作って、読んでくれました。はじめは、なぜ急に紙芝居と不思議でした。それはA4ぐらいの六枚の画用紙にクレヨンで描かれたものでした。こんな内容でした。

「あるところに一軒の家がありました。裕福とはいえないけれども、その家のみんなはとても幸せでした。それをねたんだ悪魔がいろいろな悪さをしかけてきました。育てているりんごを落としたり、その家の一番上のお姉ちゃんにカゼをひかせたり。そんな中で、下の弟にはいたずらがきまませんでした。それをくやしがつた悪魔が、今度はその家のお父さんにとんでもないいたずらをしかけました。お父さんを病気にしたのです。お父さんはうまくしゃべれなくなり、体の右側が動かせなくなりました。しかし、そんな中でも一家はくじけることなく、そのまま、幸せに暮らしました。悪魔はとうとうかんねんして、帰っていききました。」

物語の中の登場人物の姿は、どことなく私たちに似ていました。ショートヘアの女の子と丸刈りの男の子です。

紙芝居を読む母の声は大きくはありませんでしたが、りんとした強さがありました。聞いているうちに元気になっていきました。決して絵がうまかったわけではありませんでしたが、私には他のどんなものより、あたたかく、心強く感じられました。四年前より今の方が母がどんな気持ちで紙芝居を作ったのかが分かります。まだ小さい私たちのことを思っていたことだっただけです。母の願いが込められた紙芝居だったので。

しばらくして、父は退院しました。リハビリはさうとうきついものだったと思います。父がそこまで

頑張ってリハビリしたのは、多分、私や母や弟のためだったと思います。まだ上手に話せないけれど、動けないけれど、少しずつよくなってきています。私はそんな父が好きです。

私はこの突然の出来事を通して、いろいろなことを学びました。毎日の何気ない生活がいちばん大切だということ。しかもそれは何かなければ気がつかないものであること。そして、人は心と心をつなげて生きていくことで強くなっていくということです。最初から強い人などいないのです。

そして、いちばん心に残ったことは、人は困難にぶつかつたときにその人らしさが出るということです。あの時、顔色一つ変えずにいた母の強さを今もながらすごとく感じます。

母が作ってくれた紙芝居は今どこにあるのかわかりません。でも私の心の中にはあの紙芝居の一枚一枚がしっかりと刻まれています。